674
2016年
9月発行

よろこびの泉

わたし（イエス・キリスト）が与える
水を飲む者はだれでも、
決して渇くことがありません。
私が与える水は、その人の
うちで泉となり、永遠の
いのちへの水がわき出ます。

新約聖書　ヨハネ4：14

秋日和

神様の真実は変わらない

水野　源三

来る年も来る年も
さわやかな初夏には
すずらんの花が咲くように
神様の真実は変わらない

来る年も来る年も
空澄み渡る秋には
リンドウの花が咲くように
神様の真実は変わらない

花の季節過ぎ行き
人の心も移り
約束を忘れ去るとも
神様の真実は変わらない

瞬きの詩人　水野　源三第二詩集「主にまかせよ　汝が身を」より

発行所　〒630-0266　奈良県生駒市門前町七―四〇　日本ミッション
電話〇七四三（七三）一七五四　振替口座〇〇九三〇―二―六六四二番

発行人　ファベイ・D
編集人　日本ミッション編集部

印刷所　〒350-0303　埼玉県比企郡鳩山町熊井一七〇
電話〇四九（二九六）〇七二七　新生宣教団印刷部

一年分　送料共　九〇〇円
定価　一部　一八円

質問箱

問　「百歳まで健康人生を生きる」という講演会の案内が来たので参加しました。健康法、老人食、運動などの話の後コーヒータイムがあって、人生の終い方の話。最後は葬儀契約の前取りでした。

答　日本では六十五歳以上の人が総人口の3割近くになって、あなたが参加されたような「終活セミナー」が各地で開かれるようになりました。

「葬儀は破格の値段の我が社で」と案内し、その日までを明るく有意義に旅行や囲碁、将棋、趣味が楽しめる環境も用意され、人生最後の準備も出来て、残りの日々を安心して過ごしましょうと勧めます。しかし、このような晩年の過ごし方と葬儀会場（葬儀社）が決まるだけが本当の死の準備でしょうか。

あなたの魂が納得し、平安と希望に満たされ、死を受容し、感謝を持って地上の最後の瞬間を迎える準備とはどういうものでしょうか。

軽井沢の一人の開業医が、あるときからご夫妻で教会に来られるようになり、やがて洗礼を受け教会生活を続けられました。町の名士です。牧師は不思議に思って「何故教会に来られるようになったのですか」と尋ねました。するとその人は「私は今何も困っていることはありません。でももしこれから先、困難に遭い苦しむようなことがあってその時教会へ誘われたら、惨めな気持ちになるでしょう。ですから今元気で何の問題も無いときから神様を信じて生きようと教会に来たんです」と答えました。

人は誰も長い人生の日々、思いと言葉と行いで罪を犯しています。神と共に生きるようにと造られたにもかかわらず、神を信じず自己中心に生きていることこそ最大の罪なのです。教会に集い聖書を読み、イエス・キリストによる救いを得て神と共に歩んでください。そこに本当の死の備え（終活）があるのです。

「御子を信じる者は、永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。」（ヨハネ3・36）　（児玉　博之）

親と子のしあわせ 385

我が家の長男は大学二年生。名古屋で一人暮らしです。私が名古屋出身で、子どもたちが小さい頃何度か帰省したことや親戚がいることもあってか、名古屋を選びました。

一人暮らしを始めた当初は、「七時に起こして。」「ゴミの出し方がわからない。」「残ったマーボー春雨はどうしたらいい？」等々、些細な事で電話をしてきました。しばらくすると電話が来なくなり、メールをしても一言返信があれば良い方。先輩ママ達から聞いていた通りです。どうなっているのか。気になっても佐賀から名古屋へは中々行くこともできず。それが良いのだとアドバイスしてくださる方もいます。でも、夏休み、冬休みには帰省するので、元気でやっていること、成長していることは分かりました。

今年の五月、叔母の見舞いで名古屋に行くことになりました。そのことを長男に言うと、「ゴミがたまっているし、水回りも掃除して。それから、めがねを買って欲しい」と言われ、どんなことになっているかと気をもんでいました。しかし行ってみると、思ったより大丈夫でした。またゴミも、生ゴミではなくプラスチックなどの不燃ゴミの事でした（名古屋はゴミの出し方が細かいのです）。ゴミを出し、掃除をし、めがねを買いました。食事に誘うと、「ご飯は炊いているから」と。自炊をしているようです。洗濯もしていました。私は、「七〇点かな。まあまあ」と言いました。新しい自転車がありました。坂道対応の自転車をバイトして買ったそうです。私が一年前に玄関に張った「ガス、電気、水道チェック」の紙はそのままで、ちょっと笑えました。また企業の給付型奨学金を申請し認められたので、仕送りはいらないと聞き、彼なりにがんばっているのだと思いました。

子どもを遠くへ出す時心配しましたが、自分でしないといけない立場になって自立するのだとつくづく思いました。親が子を思う以上、神さまは私たちの事をいつも心配してくださいます。「あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。」（詩篇55・22）　（相原　幸紀美）

＊この「よろこびの泉」は、統一協会、エホバの証人、モルモン教のものではありません。
これらの問題でお困りの方は、上記の教会にご連絡ください。

●質問箱への投書（100文字以内）よろこびの泉に関するお問い合わせは Izumi@japanmission.org まで

祈りの力

大阪府堺市　出口　忠伸

日曜日毎に家内と子どもたちを、教会の玄関まで送迎していた私。やがて（十年後）教会の中に入り、聖書のことばを聞くようになり、やさしい例話を通して神様の愛が分かりキリストの救いへと導かれました。それは、家内の朝ごとの祈りの声が神様に聞かれていたからです。

▲日曜日の朝、教会の前で

私が柏原教会に初めて来たのは、もう三十年ほども昔のことになります。しかし、本当は、更にその十年ほど前から、教会の「玄関先まで」は来ていました。と言いますのは、家内が次男の病気を通して、近所で開かれていた家庭集会に導かれ、子どもたちと共に教会に集うようになり、その送迎のために、玄関先までは来ていたのです。

取税人の一人として

当時、私は国税局と管内の税務署に勤務する職員でした。聖書に出て来る取税人マタイやザアカイと同業だったのです。ただ、現代は正しい納税をして頂くよう努める国家公務員ですから、当時のユダヤの取税人とは全く違います。しかし、そうは言っても、お金を納めて頂くという仕事柄、良くも悪くも非常に現実的な職場なのです。当時を思い返してみますと、イエス様が罪とされることを、罪とも思わずに生活していたのではないでしょうか。また幼い頃から朝夕毎に仏壇や神棚に手を合わせる仏教信仰の盛んな北陸の田舎町で育ち、「仏教も神道もキリスト教も、根本は皆同じ神様や」と言う父の言葉にさしたる疑いを持つこともなく、キリスト教も同じだと思っていました。

家内の朝毎の祈り

そんな私が玄関先から会堂へと足を一歩踏み入れることが出来たのは、「主人が教会に集いますように。救われますように」と毎朝繰り返し祈る家内の祈りに押されてでした。最初のころは、祈る声が聞こえても余り気にならなかったのですが、徐々に「仕事や飲み会やらで毎日遅いのに、朝早くからうるさいな。まだ眠たいのにかなわんな」と布団の中でぶつぶつ呟く毎日となりました。家内の声は、幼稚園の教師をしていたこともあり、地声が大きい上によく通るのです。本人は小さい声で神様だけに祈っているつもりなのでしょうが、別室からでも本当によく聞こえるのです。実際のところは、神様にはもちろんですが、私によく聞こえるようにと大きな声で祈っていたのでしょう。家内の祈りと私の呟きとの根競べのような毎日が長く続きました。

一歩前へ

朝毎に繰り返される祈りに、私の心も「まだまだ」から「その内に」へと変えられていき、私の足がいつしか教会の玄関先から、会堂の一番後ろの席へと押されて行きました。最初のころは、牧師の説教の内容も、罪も十字架の救いも神の愛と言うことについてもよく分からないと言うのが実感でした。

当時の柏原教会は、赤レンガ造りの酒蔵を改造したもので、外壁には白ペンキで「神は愛なり」と大書されていました。神がどうして愛なのかが分かったのは「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠のいのちを得るためである。」（ヨハネ3・16）との御言葉を通してでした。神様が「ひとりも滅びないで」と言われる以上、その中には、取るに足りない取税人の末裔のようなこの自分も含まれているのだ。このための十字架であったのだと言うことを確かに受け取ることが出来ました。しかし、神様の大きな愛の中に私も包まれていることは分かりましたが、信仰を持つという決心がなかなか出来ませんでした。職場で周囲を見回しても、クリスチャンはいない（後で何人かいることを知りました）し、私自身品行方正でもない、酒もタバコも賭け事もする、とても私にはそんな資格はない、こればかりは自分が決めること、との思いに支配されていました。そんな状態のまま、月日だけがいたずらに過ぎていきました。

フット・プリント（足跡）

ある集会のメッセージの中で、「二人の足跡」の話をされました。ある人がイエス様と歩いていて二人の後ろには二つの足跡が続いていました。ところがある所からその足跡が一つになったというのです。私の理解では、一つになった足跡はイエス様のもの、消えた方は多分自分だろう、そしてそれは、自分がイエス様から離れたためだろうと考えたのですが、それは、辛くて歩けなかった時、神様が私を背負って歩いておられたからだと教えられ、目から鱗が落ちる思いでした。

こんな私でさえも、神様は一方的に愛してくださるのです。決して私が神様を選んだのではなかったのに。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。」（ヨハネ15・16）

救いは私たち人間の思いではなく、実に神様の一方的な恵みであること、また、自分が如何に傲慢で、様々な罪を抱えた罪人であるかと言うことをはっきりと示されました。このことを通して、私達人間が造った神様ではなく、私達人間を造った神様を信じたいとの決心が与えられ、実に十年目に家内の祈りは聴かれました。

祈りと忍耐の中に

昭和二十年生まれの私は、六十二年十二月四十二歳で受洗しました。家内の朝毎の祈りに感謝するとともに、何よりも忍耐をもって待ち続けてくださった主イエス様の大きな御愛に感謝しました。

しかし、それまでの生活が劇的に変化したわけではありません。国税局や税務署での仕事にも、常に困難や試練のときがありました。そんなとき、折に触れて聖書の御言葉が支えとなり導いてくれました。例えば、「おおいかぶされたもので、現れてこないものはなく、隠れているもので、知られてこないものはない」（ルカ12・2）という御言葉を通して、調査する立場、また、調査を受ける納税者の立場から、人間のすることは、必ず表に現されて来るもので、今は隠せていると思っていることでも必ず見つかるものだと、調査官を励ましたり、正しい申告をすることが、結局は一番の節税になるのですよ、と納税者の方々に適正申告を促したりもしました。

平成十六年に退職し、現在は税理士として第二の人生を歩んでおりますが、この世のことは平穏な日々のみではなく、常に様々な困難や試練が生じてきます。しかし、感謝なことに、神様は試練と同時に常に解決の道をも備えてくださいます。信じてお委ねできる方がおられることは、大きな心の支えとなっています

家内の朝毎の祈りの中から、私が救われ、そして二人の子どもが救われ、更に孫の一人が救われました。「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）との御言葉はまことに真実です。

『心の一新によって自分を変えなさい』ローマ12：2